

「記憶」－「色」

小橋圭介

Memory-Color

Keisuke KOHASHI

「色」は、その時々イメージや記憶、気持ちなど様々なものを代弁しているように思う。

この夏、実家周辺の風景を描きながらそう感じた。なぜ今更ながら実家周辺を描こうと思ったのか。

それは、近隣の家の建て壊しや住宅の増加によって景観が変化し、昔の記憶との間に違和感を感じたからだ。当たり前のように目の前にあった物が、永遠にある物ではないという事。変化し、消えていく物であると感じた。そして、単に移り行く景色の「記録」としてではなく、「記憶」としてのそれらの風景を描いてみたいと思った。

言われるまでも無い事かもしれないが、風景の変化自体はそんなに珍しい事ではなく、「変化」という事に重きを置くと、どこを描いてもいい訳なのだが、「記憶」という意味合いも含めて、自分にとっての身近な場所を題材として選択した。

「記憶」の中にある風景…

「形」であったり「色」であったり、もちろん「匂い」であったり「音」であったり…様々な物があると思う。これらの情報は、ずっと記憶という形の中で生き続けるのだろうか…いつか、風化して跡形も無くなってしまふのだろうか。もし、消えるのならば、全て同時に消えるのだろうか。それとも、順番があるのだろうか。もしそうならば、最後まで残るのは何なのだろうか。

そのような事を考えながら、「色」について考えていた。セピア色の写真を観て、古さや懐かしさを感じるのも、これと似たような現象なのかもしれない。

もちろん、人それぞれの経験等もイメージに影響すると思うので、「セピア」だから「昔」という程、安易なものでは無いとは思ふし、もちろん、他の「色」もイメージするだろう。

技術面から言うと、私が普段から行っている「手描き」による「アナログ表現」と、「コンピュータ」による「デジタル表現」、この2つの表現をお互いに干渉させ、作品制作をおこなっていく手段を取っ

た。鉛筆描きによる風景画をベースに、鉛筆のこすれや、絵の具のにじみ等、イメージを再現するための素材を作りながら制作を進め、自己のイメージに合う物を繰り返し検証していった。自分自身の考えとしては、「コンピュータ」だからといって、フィルター等の効果を多用していかにもコンピュータを使いました という作品はあまり好みではないので、あくまでコンピュータを「画材」の1つとして扱い、「手」だけでは物理的に困難な部分を、コンピュータで補っていった。

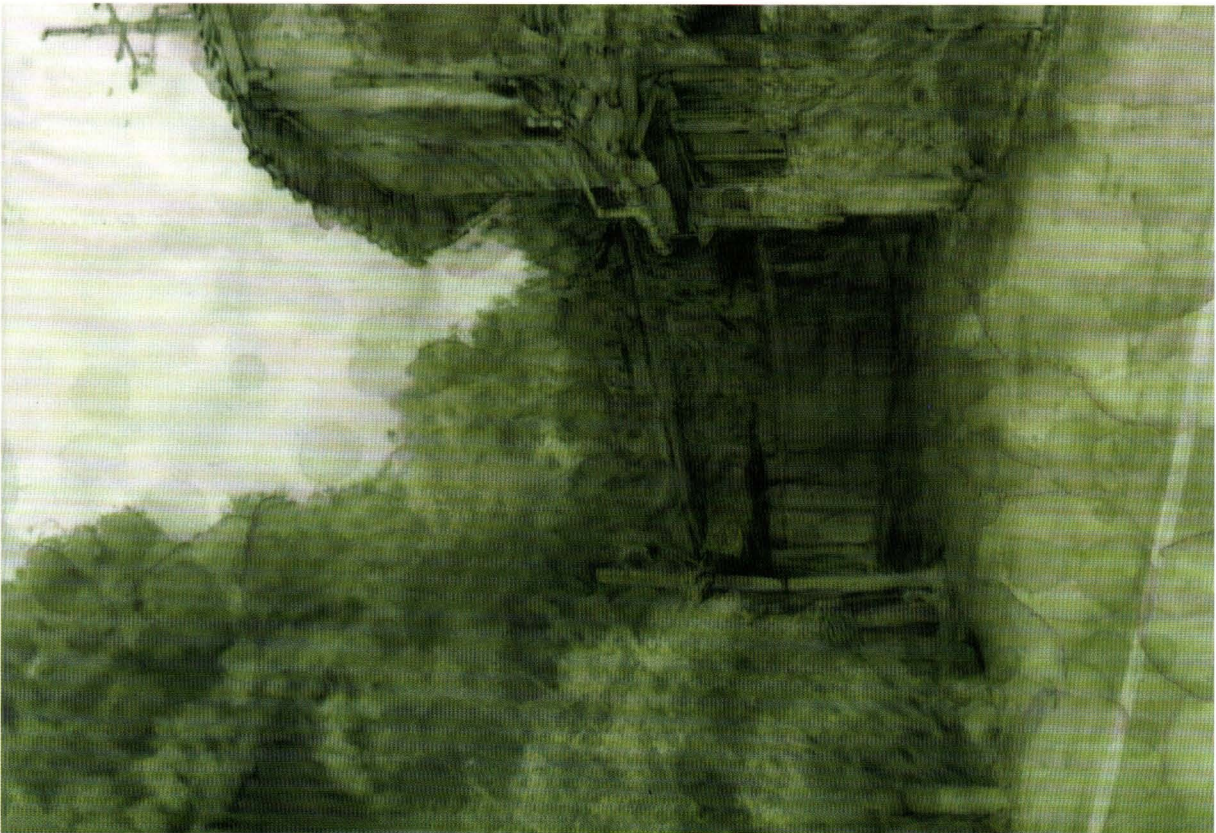
2つの表現手段を掛け合わせる事で、どちらでもあり、どちらでもない、その狭間にある「領域」を目指し、その曖昧さが、今回の作品のテーマでもある「記憶」などにも、反映されればと考え制作をおこなっていった。

今回の制作で、自分の身近にある風景を観て改めて気づく「形」や「色」があったように思う。身近である故に当たり前のように消費し、いかにちゃんと観ていなかったかというのを感じた。実際に、観てはいても描くのは初めてなので、「形」に関しては特に、こんな物があったのかと思うこともしばしばであった。色に関しては、個々の素材などは確かに覚えていないが、空気感というか、その空間の持つ雰囲気というか、全体の「色」というものは、必ずしもはっきりという訳では無いにしろ、概ね何かしら感じられる。その「色」が、その場所でのどういった記憶によってその「色」に観えるのかは、はっきりとしないのだが。

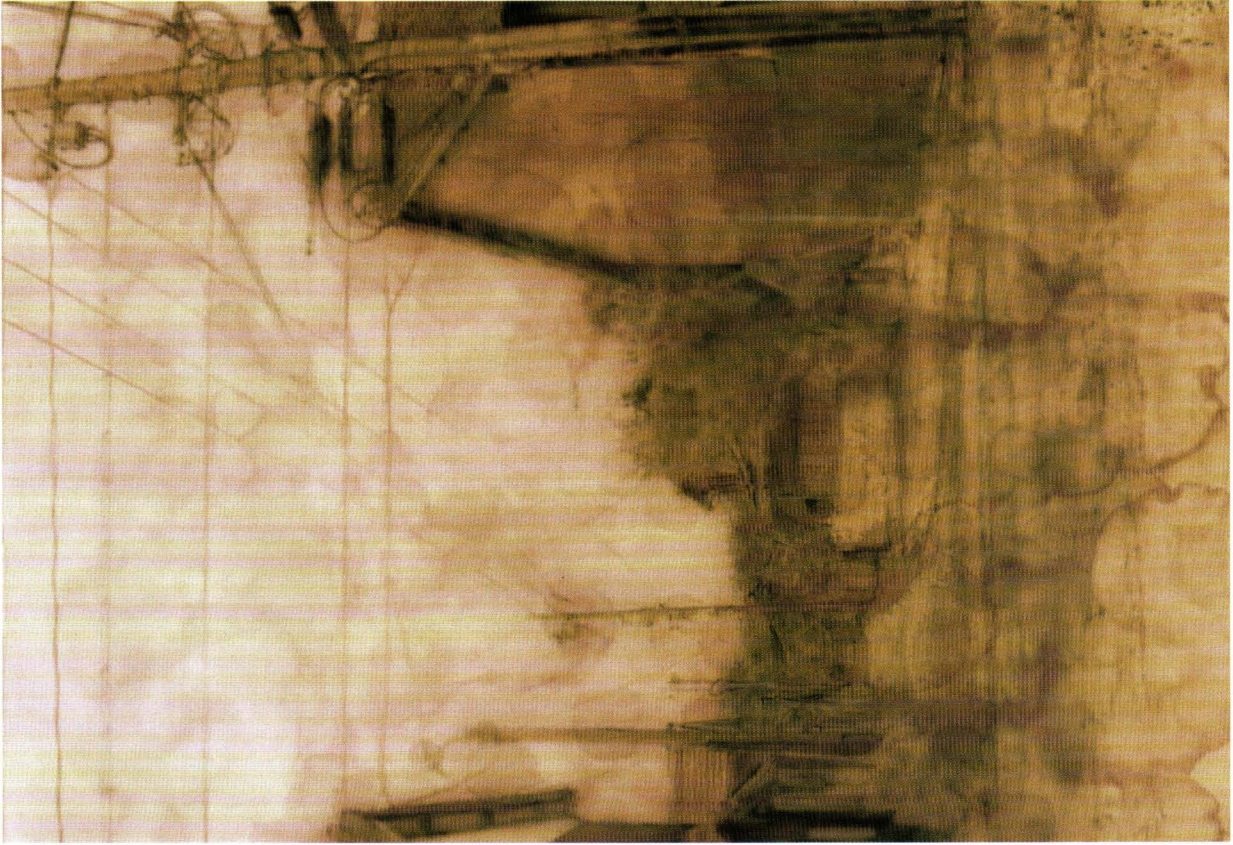
今回、モチーフにした風景は、自分自身としても、この場所を観てもらおうとかそういったものはあまりない。美しい、絵になる風景というものを選んだ意識も特にはない。本当にどこにでもあるようなありふれた風景ではあるが、この作品に触れた人が、作品を触媒にして、その人自身の懐かしい場所であったり、風景を想起させ、「記憶」や「色」という物に対して、少しでも思いを巡らせてほしい。



2005年 鉛筆 + CG
210 x 297 (mm)



「記憶」 - 「色」
小橋 圭介
Memory - Color
keisuke kohashi



2005年 鉛筆 + CG
210 × 297 (mm)

